

生活を豊かにする保育計画

～子どもも保育者も楽しい保育を～

園名

朱い実保育園

氏名

門田 慧

3歳児クラスで大根の栽培から心を寄せ、たくあん・恵方巻クッキング、そして節分へと楽しんできた保育実践です。年間計画を立てるにあたり、新しいクラスでのドキドキ感の解消や新担任との関係作りを丁寧に行うことを目指しました。そこで、栽培とクッキングを軸に一緒に「美味しいね!」「楽しいね!」を叶える取り組みを大切にしてきました。

また、たくあんづくりは保育者自身の「子どもたちと楽しい時間を共有したい!」という思いからの発案と計画でもありました。地域の方との出会いや子どもたちの思いから、一年を通して2代目大根の種を植えるまでに計画は発展し深まっていきました。

その過程で、大根と共に子どもたちも成長し自分たちの生活として思考する姿を目の当たりにしてきました。みんなで気持ちを寄せる経験の先に、子ども自身が園生活の一つひとつに目を向けることへと繋がる姿があります。自分たちの「生活を豊かに」するとは何か。その問いに子どもらしいいきいきとした姿から考察します。

「生活を豊かにする保育計画～子どもも保育者も楽しい保育を～」

朱い実保育園 門田 慧

1. はじめに

朱い実保育園は京都市内にある定員 120 名の認可保育園です。周辺には幼児の徒歩圏内に吉田山や鴨川など自然も多くあり、お寺などの文化的な環境も特色ある地域にあります。本クラスは 3 歳児クラス 23 名を私（保育士歴 5 年目・幼児 2 回目）と保育者（保育士歴 4 年目・幼児 1 回目）の二人で担任しました。午前中は非常勤保育者が加配として加わります。担任の二人は 3 歳児クラス担任が初めてだったので、とにかく子どもの様子を共有しながら保育を進めていく毎日でした。本稿は大根の栽培からクッキングを通して生活を豊かにすることを目指して計画し、一年を通して楽しんできた保育記録です。

2. 年間の保育計画 栽培とクッキング

保育所保育指針によると、保育の「ねらい」及び「内容」について、5 領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）¹が示されています。保育者として子どもの発達や集団の姿を捉える参考であり、保育者同士の共通認識として共に計画をしていく上での材料でもあります。その上で、保育所保育指針を大きな保育計画の意義として捉えつつ、本園では蓄積された保育実践・記録のもと「一人ひとりが心地よい生活づくり」を近年意識して取り組んでいます。乳児期から分かりやすい生活や、子どもの困り感から気持ちを推察することで手立てを共に考えています。園内の生活づくりへの共通理解から本クラスの保育計画も、まずは生活の安定を第一に考えました。クラスの困りごとをそのクラスだけで解決を目指すのではなく、クラスを超えて様々な保育者で考えていく環境にあります。

幼児クラスに進級し、一人ひとりに目を向けると様々な心境があるようでした。気持ちが落ち着かず、ドキドキでいっぱいの子も複数名いました。正直なところ、秋までの半年間は生活が落ち着くまでなかなか大変だったと振り返ります。ちょっと心も折れかけましたが、他クラスの保育者の力も借りながら「分かりやすい生活づくり」を心がけました。いつもの場所やいつもの流れを決めて見通しを持ちつつ、自分のことを自分で出来るようにサポート。クラス集団として生活の流れは比較的早く安定したことで、先述したドキドキいっぱいの子に腰を据えて関わることができました。個々の状況に応じて、保護者の協力ももらいながら絵カードなどの視覚的な支援も取り入れました。

生活づくりに取り組む中で新たに見えてきたのが、新しい集団に落ち着かない子どもたちの姿でした。子どもの人数はグッと多くなり 2 クラスが合流したことで、今まで関わった事のない友だちもいます。担任も 3 人から 2 人に減り、信頼関係もまだこれからです。そんな生活の中で、園庭に生えていたよもぎに子どもたちが興味を持ち、『よもぎだんご』²の絵本を頼りによもぎ団子を作ったことをきっかけにクラス全体で一つの食材に気持ちを向けながら友だちの存在を感じることでできるクッキングに取り組みたいと保育計画を意識し始めました。そこで、本物の食材に実際に触れ、自分たちで作って「美味しいね」と気持ちを通わせることを大切にしたいと考えました。また、初めましての担任保育者と子どもが互いに同じ世界を共有し、思いを共にしようとする「横並びのまなざし」³を持つ保育活動として信頼関係を築くきっかけとなりました。

年間のクッキング計画として大きく意識したことは二つです。一つは、季節の食材を味わう取

り組みにすること。季節の食材こそ美味しいし、子どもたちにも食べられる時期や美味しい季節があることを伝えたいです。年中スーパーで食材が手に入る今日ですが、実際にタネから育てることで元気に育つ季節があることを知って欲しいねらいがありました。さらに、木いちごを見つけに山を登ったり、生活の中で季節の食材に触れる機会を意識して作りました。

もう一つは、手先の操作を意識して取り入れたクッキングにすること。手先の細やかな操作を意識する時期であり、個人差が気になっていました。ハサミやペンなどを使った製作活動自体にも苦手意識が芽生え始めている時期だからこそ、「作って食べる」という取り組みの中で手先を使うハードルを下げられたらいいなと考えました。よもぎ団子をはじめとして、白玉団子やパン作りなど両手で「丸める」をテーマにクッキングを計画しました。同じ工程で色んなものを作ることができるクッキングを給食室の先生にも相談させてもらいながら都度考えていきました。

3. 保育者の「子どもたちとやりたい！」発案と計画

本実践の発案は前年度（私は1・2歳混合クラスの担任）に遡ります。絵本を読もうと何気なく手に取った『のりまき』という絵本。「これはきゅうり〜、エビもいれて〜」と具材のおはなしをしながら、最後はくると海苔を巻いてのりまきを食べる真似っこをして楽しみました。そんな楽しいやり取りをした後日、料理レシピ本を購読するのが趣味な私は休日に栗原はるみさんの冬の料理本^{vi}を読んでいた。するとそこに掲載されていたのが「たくあん」の作り方。私の頭の中で繋がる「のりまき」と「たくあん」。子どもたちとやってみたい！が思いついた瞬間でした。それをきっかけに、「節分に向けて恵方巻のクッキング面白そうだな」と計画を立て始めました。そして、「そういえば冬野菜って栽培したこと今までないな、大根育てたらたくあんを作ることができるのでは!？」と妄想が広がります。気づけばすでに節分の時期はとっくに過ぎていて…これは次年度のクラスでやってみようとして私の中で温めていました。

年間計画を立てる段階で相手には「大根の栽培からたくあん作り」をしたいことを相談させてもらい、10月から栽培をスタートさせる計画をしました。と言っても、行事のたびに子どもも大人もドキドキの幼児クラス。10月の運動会に頭がいっぱいで中旬ごろようやく生活が落ち着いたのです。本当は子どもたちと種を買いに行きたかったのですが、私が買ってきて大根栽培がスタートしました。

4. 大根の栽培を子どもたちに提案

保育者から突然の大根栽培の提案。どんな反応かな？と心配でしたが、夏野菜（トマト、インゲン、とうもろこし）を育てた経験もあり栽培にはとても前向きな様子です。

EP1) なーんの種？クイズ

おはようの時間に私が「ジャン、これなーんだ!？」と突然子どもたちに種を見せます。興味津々で覗き込み、「たね!」と返ってきます。私が「何の種でしょう?」とクイズを出すと、「お花?」とKちゃん。私は「お野菜の種だよ」とヒントを出すと、知ってる野菜を絞り出しますが大根は出てきません。さらに「冬野菜! 冬に育つ野菜だよ」のヒントに子どもたちの頭上には「???」は浮かんでしまいます(冬野菜の伝え方って難しい!)。言い方を変えて「お鍋する時に入ってる野菜なーんだ?」と聞いてみると、「白菜!」「キャベツ?」と出始め、更なるヒントを頼りに「大根!」に辿り着いた子どもたち。種クイズに盛り上がったクラスに改めて「こ

の大根みんなで育ててみない？」と問いかけると「いいねー！」とワクワクする返事が返ってきました。

早速種まきをしにクラス全員で園庭のプランターの周りへ。苗からの栽培は夏野菜の時に経験がありました。種からは初めての子どもたちに向けてまずは私から植え方を伝えます。1. 人差し指で土に穴をあけてお家を作ってあげる。2. 種を1粒入れる。3. やさしく土のお布団をかけてあげる。というポイントを子どもたちはじーっと聞いています。そして、一粒ずつ子どもたちに「よく見てみてね」と言いながら手渡します。「ピンク色だ！」と可愛いもの好きのMちゃんが目をキラキラ。「小さい！」とMちゃんも種をじーっと見つめています。初めての種まきにワクワクしながら順番に種を植えていきました。「早く芽が出ないかなー」と植え終わったTくんがぽつり。「トトロみたい！」とMくんは種から芽がでることを心待ちにしている様子です。

5. 「自分たちの大根」への意識作り

懸念の一つが「種を植えただけで植えっぱなしになりそう」ということでした。子どももあるあるなのが、おやつで出た果物の種を植えたい！と言って園庭に植えたっきり、次の日から気にする様子があまりないのです。「植えた種どうなった？」と声をかけると「あ…」と思い出してバツ悪そうにしている場面に何度か出会ってきました。変化が目に見えにくいものに気持ちを向け続けるって難しいよねと感じていました。そこで、プランターは陽がよく当たり、かつ子どもたちの目にも届きやすい場所に設置しました。水やりは「水やりしたい！」という子に声をかけつつ、保育者と一緒にお世話をしました。各々で大根に気持ちを向けると同時に、クラス全体で大根の様子を確認する時間も設けるようにしました。週二回ほど散歩に出掛けていたので、園外に出る時には必ず大根のプランターの前で立ち止まり、「大きくなったかな？」とみんなで様子を見てから出かけるように心がけてきました。

見守られながらすくすくと成長する大根。大きくなって間引いた大根菜はおかかと和えてふりかけにしました。料理好きの私は子どもたちの前で作りたいと思い、目の前で葉っぱを切りフライパンをふるいました。子どもたちは包丁のトントンと切れる音、醤油の焦げる香り、宙を舞う大根菜、自分たちが育てている野菜に気持ちを向けるのに十分すぎるほどの面白いポイントが沢山です。

数年前からコロナ禍真っ只中となり、見るだけのクッキングしかできず、子どもたちの経験として不足感があるのではとも悩んでいました。しかし、ある保護者から「あの時目の前で先生が作ってくれてから、苦手だったピーマンが食べられるようになったんですよ。小学校の給食でも好きって言ってピーマン食べてるんです！」と教えてもらいました。その言葉から見るだけのクッキングも大切にしています。

収穫までの過程でも水やりや観察、クッキングを通して、確実に「自分たちの大根」としての意識がクラスの中で広がっていきました。

6. 野菜づくり計画の発展

順調に思われた大根でしたが、気温もグッと下がり冬本番を迎え成長がゆっくり。何だか小さいまま年末年始の休みに突入してしまうことになったのです。初めての冬野菜の栽培であり、担任たちは「え！このまま年越しできるのかな？もう抜きちゃう？」と不安が募っていました。そ

んな時に偶然、プライベートの繋がりから地元上賀茂で野菜を育てる農家さんと知り合いました。ありがたいことに、野菜栽培について教を乞うことができました。まずはそのまま年を越すことはできるということを教えてもらい、ホッと一安心。種まきが1週間遅れると収穫が1ヶ月遅れることもあるそうです。やっぱり種まきが遅くなってしまったことは反省点でした。

そして、注意点として気温が上がってくると春に向けて花を咲かせてしまうことを教わりました。そのことを聞き、「花が咲くのか…大根の花って見たことないな。花が咲くってことはもしかして種が取れるんじゃない!?」と私の中でまた一つやってみたい!が生まれました。栽培→クッキングまでしかなかった計画がもう一つ展開され、再び栽培へと繋がるきっかけとなりました。そして、そのことを担任間で話し合い、6本育てているうちの1本は収穫せずにそのまま残しておくことになりました。

7. いよいよ大根収穫の時が来た!

無事に年を越し1月の中頃、大きくなった大根をいよいよ収穫する日になりました。「自分たちの大根」として育ててきたことで、全員が大根をいよいよ抜くぞという気持ちです。その気持ちを大事にするためにも、全員が大根に触れて収穫できるようにしたいと思い、収穫場面でも担任間で計画を立てました。5本収穫することになっていたの、まずは4グループ(生活の中で分かれるグループ)で一本ずつを子どもだけで収穫します。1グループが4・5人なので、大根の根元を持つ子や葉っぱの先を持つ子など大根のどこかを握りながら「せーの!」と力を合わせて引っこ抜きました。土の中から現れたのは誰もが見たことのある立派な大根!「でっかい!」と歓声が上がります。

EP2) うんとこしょ!大きな大根ごっこ

4グループが抜いた後、おもむろにラスト一本の大根に手をかけ私から始まる「うーん、この大根は大きいぞ!抜けないなあ!」の一芝居。それに気づいたのはTくん、Gくん、Mくんの3人です。「カドちゃん(私の呼び名)引っ張る!」と私のパーカーの裾を3人が引っ張り始めます。「うんとこしょ!どっこいしょ!」まだまだ大根は抜けません。そのやり取りに気づいた周囲の子どもと相方が「大きな大根だあ!」「みんなで引っ張るよ!」と声をかけます。私から後ろに連なって前の人をしっかりと持ち、大きなかぶのイメージで「うんとこしょ!どっこいしょ!」を全員で楽しめます。普段全体と同じタイミングで楽しむことが難しいMちゃんとIちゃんもここぞとばかりに一緒に列の中に入ります。そして、最後の最後に「スッポーン!!!」と大根が抜けると、みんなで「やったー!」と大喜び。楽しさいっぱい心一つになる瞬間でした。(図1)

その後、たらいに水を張って大根についた土を洗いました。私の裾を引っ張っていたMくんは「大根のお風呂やなあ」とタワシで大根を綺麗にしてあげています。隣のYちゃんも「ほんまや、極楽〜」と水をかけてあげていました。なんて可愛いんでしょう。

種から大きくなるまで自分たちで見守ってきたからこそその優しい気持ちの寄せ方だなと感じました。収穫を見に来た他クラスの職員や給食の先生に「こんなおっきな大根取れたんやで!」ととっても自慢げな顔で見せていたのが印象的でした。僕たちってすごい!が溢れています。

8. 自分たちのことを自分たちで考える

大根を収穫したらどうやって食べるのかは子どもたちに聞いてみようということになりました

た。もちろん元々のたくあんの計画もあるのですが、自分たちで育てた思いのある大根をどうやって食べるのかも自分たちで考えられたらいいなと思い、「どうやって食べようか？」と相談してみました。3歳児クラスの子どもたちにとってはちょっと難しいけれど、ワクワクの会議です。

EP3) 大根どうやって食べる？

私からの「どうやって食べようか？」の問いかけに、しばらく考えていた子どもたち。葉っぱのおかか和えが好きなHちゃんから「ふりかけ！」とアイデアが出ます。「お！葉っぱも大きいから沢山作れちゃうね」と話しながら、周りの子も「それがいい！」と賛同の声もあがります。Iさんは「お鍋がいいな」と冬野菜の話を出したのか、季節感ばっちりの案を提案。Kくんは「つけものもいい！」とまさかのたくあんに繋がる案も飛び出します。そして、Tくんからは思いもよらない「大根餅って知ってる？」と面白い発言もありました。どうやら家族で行った中華街で目にしたようなのですが、担任は作ったことも食べたこともなくびっくり。

子どもたちからは4つのクッキング案が出てきたので、せっかく5本も大根が取れたのだから全部やってみようか！ということになりました。

①お鍋

給食室にお願いして、給食のおつゆに大根の葉っぱを入れてもらいました。「めっちゃ美味しい」と何度もお代わりしていました。他クラスのおつゆにも入っていたので、他職員にも「おいしかったよ。ごちそうさま！」と声をかけてもらい嬉しそうな表情でした。

②ふりかけ

前回同様に子どもたちの前で、炒めておかかと和えました。今回はごま油で香り高く。

③大根餅

春から「丸める」をテーマにクッキングを計画してきたこともあり、ぜひやってみようということになりました。ただ、初めて作るものだったので家で大根餅を試作。子どもたちと作る時には生の大根を味見してみても大根の辛さを知ったり、焼くことで甘くなることも感じてもらえるといいなと料理しました。初めての料理でしたが、甘辛のタレに絡ませて食べると「もっと食べたーい」と大人気でした。

④漬け物（たくあん）

たくあん作りとしてクッキングを進めました。次章にてエピソード紹介。

作り方 大根1本・砂糖80g・塩30g・酢大さじ2

1、大根を洗って水気を切る。風通しの良い場所で3日ほど干す。

2、キッチンペーパーで拭き、保存用ポリ袋に入れる。

調味料を加え、空気を抜いて密閉する。

3、冷蔵庫に入れ、上下を返しながら漬ける。2-3日後から食べられる。

9. たくあんと恵方巻き

私の中で1年間あたたためてきたたくあん作りにいよいよ取り掛かりました。1日目は「たくあんって知ってる？」という話から、実は大根のお漬け物なんだよと伝えてたくあん作りが始まりました。まずは大根を麻紐で結んで部屋から見える軒下に2本の大根を吊るしました(図2)。大根が外に吊るされていることに不思議そうな子どもたち。翌週に「これなんだ？」と嗅いだり舐めたりしながら調味料当てクイズをして、ポリ袋に干した大根を漬け込みました。直接食材に

は触れないのでポリ袋の上から大根に触ってみました。冷蔵庫で保管してさらに翌週、たくあんを取り出します。

EP4) 強くなるぞ！恵方巻きづくり

まずは袋の上から触って大根の状態を確認します。もみもみ…「やわらかくなってるー！」と子どもたち。あんなに立派だった大根がふにゃふにゃになってることに驚きます。すると、Kちゃんが「お水いっぱいになってる！」と数日前よりポリ袋の中に水分が増えていることに気が付きました。出してみると…「ふにゃんふにゃんやー！」と大根の思わぬ変わりぶりに一同驚き！たくあんらしい甘い漬物の匂いもしてきます。保育者が細長くたくあんを切り、子どもたちの前には海苔（咀嚼力に合わせて切れ込み）と白米と自分で選んだ具材たち。大事なたくあんを一本ずつのせてもらって、いよいよ！「せーの！くるん！！」と目の前の海苔をご飯と一緒に丸めます。初めてののりまきづくりでしたが最後のぎゅぎゅ！も頑張って完成しました。

のりまきが出来上がると、私から恵方巻についての小咄をひとつ。「縁起のいい方向に向かってしずかーにのりまきを食べるんだよ。今年は北北東（指さしながら）ね。良いことありますよ！って恵方巻を食べて、力もモリモリになるぞ！」と話しました。数日後に迫る節分の鬼にドキドキしている子どもたちから「これ食べて鬼やっつけるぞ！うおー！」と威勢の良いやる気満々の声がします！全員で恵方を向いて「いただきまーす！」と大きな口を開けて恵方巻を頬張りしました（図3）。私が思わず「おいしー！これは力が出そうだね〜！」と言うと、「しー！喋ったらダメ！」と子どもたちに怒られてしまいました。いつもは賑やかな食事場面もこの時ばかりはしーんと真剣です。

節分という行事に絡めた恵方巻きクッキングでは、鬼をやっつける！3歳児らしいイッチョマエの姿^{vi}がありました。次の日には新聞紙を丸めて豆を作り保育者がオニ役になって、もうやる気満々。何も怖くないぞと言わんばかりの勢いです。その横でおままごと中のRちゃんもせっせとフェルトで海苔巻きを巻いて振る舞っていました。

そして、節分の日。遠くから聞こえてくる鬼の声…乳児の泣き声…もう怖くなってきます。鬼の姿が見えると大号泣！やっぱり怖いもんは怖いよね。そんな中ちょっと頑張ってみたい気持ちの子どもたち。新聞の豆を一粒ずつ必死に投げていて、なんだか大きくなった気持ちが子どもたちの中にあるんだなと感じる一幕でした。

10. 栽培・クッキング計画のその先へ

2月にたくあん作りからの恵方巻と大根を存分に楽しんだ後も、子どもたちの生活は続きます。次年度となり、園児の転入園があり22名で年中クラスに進級しました。私は持ち上がりで、相方は新しく3年目の職員になりました。加配の非常勤さんも続けて入ってもらえたので大きな混乱なく、落ち着いて新年度を迎えることができました。

さて、一本残した大根はというと、グングン茎が伸びて4月に入り小さなつぼみができました。「何色のお花かな？」と子どもたちとつぼみから見守りました。Yちゃんは「ピンク色のお花じゃない？だってピンクの種だったもん！」と予想。Tくんは「黄色でしょ！（散歩先の）鴨川には黄色の菜の花が咲いてた！」などなど、その子なりの理由で色を予想していました。子どもなりに理由付けし、思考する力^{vii}が大きくなっているのを間近で感じます。日差しも温かくなってきた頃、待ちに待った花が咲きました。色は白い花びらに外側のふちが薄紫の可愛い花でした。嬉し

そんな子どもたちに「このままシオシオになるまで見守って、種取ろうね。」と話していました。他のクラスの職員からは「あの大根抜き忘れてない!?花咲いてるで!」と言われていましたが、Kちゃんが自慢気に「種とれんねんで!」と教えてあげると、「えー!!」と驚かれたりしていました。長い大根観察の期間でしたが、刻々と変化する姿やそこに集まる蝶やアブラムシ、テントウムシに喜びながら気持ちを向け続けていました。

梅雨の合間、晴れの日が続いたタイミングを見計らって、クラス全員で種を取りにかかりました。花も葉もなくなって、種が入っているであろう鞘とアブラムシだらけの大根に果敢に手を伸ばしてまずは鞘を外しました。「こんなにあるのー!?!」と驚くMちゃん。「こっちは任せて!」と最後の一房まで取りきるTくん。Tくんの背中についたアブラムシをMくんが取ってくれます。「お皿持つからココにいれて」とIくんはサポート役。みんなでワイワイ楽しみながらの収穫になりました。その後は部屋に入って一粒ずつ鞘から種を取り出します。半年以上前に土の中に植えた種がこうしてまた採れる不思議を「やったー!とれた!」と味わっている様子でした。最後の一粒まで大事に大事に集めます。

EP5) これって何個あるんやろ?

集まった大根のタネを覗き込んでIくんが「これって何個あるんやろ?」と素朴な疑問。指さしながら数えますが、途中で分からなくなり「うーん。」と難しそうな顔をしていました。そこで次の日に、10ずつの枠をたくさん用意して並べていけるように準備してみました。すると、数えようとしていたIくんに加えMちゃん、Kちゃんが一粒ずつ黙々と枠の中に並べていきました。並べ終えて最後に一緒に数えると…なんと310個の種が取れたことが判明!「えー!こんなにあったの!?!」とMちゃん。最後まで数え切ったIくんは「自分で数えたんやで!」ととっても満足そうな表情でした。

Iくんは身体も小さく気持ちも後ろ向きなことが多かったので、どこかで自信を持ってみんなの中で輝ける瞬間があればいいなと思っていたところでした。そこで、翌日のおはようの時間に「大根の種が何個あったか教えてください!」とIくんに聞くと、みんなの前で「310です!」と自信たっぷりに教えてくれました。それを聞いたみんなは「おー!!!」と想像以上の数字とそれを数え上げたIくんにびっくりでした。

新年度になってからも変わらず栽培(かぼちゃフェスタ)やクッキングを楽しんできて、運動会も無事に終わりました。10月の大根の種をまく季節がやって来ました。カレンダーにも植える日に印をつけてみんなでワクワク。朝夕の時間を使って去年は一緒にできなかった土づくりから子どもたちと一緒に準備を進めました。カナブンの幼虫を見つけたり、フカフカの土の感触を味わったりして野菜を育てる大変さや面白さを一緒に感じることができました。

種まき当日は種まきのプロフェッショナルになっている子どもたちに10粒ずつタネを手渡すと、上手にプランターの中に植えていきます。他クラスの職員が覗き込むと「こうやって(指を土に差して穴をあけながら)植えんねんで!」と得意げに教えてあげていました。「またたくあん作ろうね。」と美味しかったたくあんを思い出しているTくん。その発言にMちゃんは「こんなに(310個の種)できたら食べきれへん…」と困った表情。発芽する気満々の会話の子どもたちをよそに、私たち担任はちゃんと芽が出るのかな…と自分たちで採ったタネからの栽培という初の取り組みにドキドキでした。「水やり当番どうする?」とSちゃんの提案により、夏野菜の収穫から休止していた水やり当番も復活。自分たちで育てて味わうことへの見通しがクラスにあるの

で、その水やり当番に「えー」と言う子がいないのがすごいなあと思います。

ドキドキの種まきから3日後、見事に双葉がたくさん土の中から顔を出してくれました！いつものように園外散歩の前に全員でプランターを覗き込み、「やったー！！」とみんなで大喜び。数えてみると、100以上の種が発芽していてこれには大人も子どももびっくり！子どもたちと一緒に発見や驚き、感動が味わえるのが栽培の取り組みの良い所です。一年をかけて大根を見守り、子どもたち自身も大きくなりながら『めぐりのち』を肌と心で感じています。

11. おわりに

保育計画を立てるにあたり、信条として「生活を豊かに」することを目指してきました。それは、単に「色々な経験をする」ということではありません。野菜を通して自然や科学に触れ、発見と喜びから日々の生活にメリハリと充足感を得ることにつながります。そして、その探究する心はさらにきめ細かい生活に意識を向けることとなります。そんなことを感じた2代目大根を種まきした後の後日談があります。

EP6) 綱引きに負けた…もっと強くなりたい！

ある日、ホールで私たち年中クラスと年少クラスで綱引き勝負をすることになりました。両クラスとも今夏飼っているカブトムシ(年中)とクワガタムシ(年少)になりきっていざ勝負です！私は「流石に年中がサクッと勝ってしまうやろな…」と思いながら勝負を見守ることに。結果は…なんと年少クラスの勝利！まさかの結果に、呆然と立ち尽くす年中さん。うずくまるIちゃんに、涙を浮かべるMちゃん、大号泣のRちゃん。思いもよらない結果でしたが、真剣勝負にこんなに気持ちを向けて挑めるんだと知ることができました。悔しがっていると、Tくんの「もっと修行してムキムキにならないとね！」と前向きな発言に子どもたちも「そうしよう！」とホール中を走り回りました。

そのうち、給食の時間が近づいてきました。「今日の給食なにかな？」とKちゃん。みんなでホールに隣接する給食室前にメニューを確かめに行ってみました。すると、壁に掲示してある食材ボードに気づく子どもたち。給食の先生が作ってくれた食材ボードには3大栄養素に分けて食材の絵が貼ってあります。文字を読めるAちゃんが「病気になるって書いてあるよ」と率先して読んでくれます。その中になんと大根が入っているではありませんか！子どもたちは「大根だー！これで強くなれる！」と大喜びでした。給食中も食材ボードを見ながら食べているものを確認しつつ、「これ食べて、あとは寝たら強くなるね！」と子ども同士で話し合っていました。

育てている野菜が自分たちの身体を強くしたり、病気に負けないようにしてくれることを知り、悔しい気持ちを次へのバネにする姿がありました。食材ボードの掲示自体は昨年からずっとありましたが、子どもたちから目を向けることはほとんどありませんでした。栽培から食材に触れて、勝負に心動かされた今だからこそ、自分たちの生活に意欲を持って目を向けることができました。自分たちの生活に目を向けることは、まさに「生活を豊かに」することにつながっています。

渡邊[※]は保育内容の構造化の必要性を述べており、「あそび・生活・課業・行事」の4つの構造が示されています。栽培やクッキング活動自体は課業にあたり、準備され展開される意図的・系統的な共同化された教育的カリキュラムであります。構造化された「課業」としての一定の活動の区切りとしながらも決してそれぞれが切り離されたものではありませんでした。前述したエピソードにもあるように、4つの構造同士が相互に響き合い、結びつきながら保育園生活の意欲を高

めるものになっていきました。さらに、子どもの発達に応じてその結びつきはより複雑で豊かなものになっています。

私は子どもの発見や不思議に出会う瞬間に保育者として隣にすることができます。子どもの心の中にどのような「ワクワク・ドキドキ」が起こっているのか^xに目を向けることができます。そこから発達の理解を土台に保育計画を立て、展開する過程が保育の醍醐味であると感じます。保育者である私自身の「子どもたちと楽しい時間を共有したい！」がつながり、子どものアイデアから保育がさらに展開し、嬉しいも悔しいも成功も失敗も心を沢山動かして充実した子どもたちの表情を見ると私は心から保育が楽しいと言えるのです。



図 2



図 1



図 3

参考・引用文献

- ⁱ 厚生労働省編（2018）『保育所保育指針解説』 p.183. フレーベル館
- ⁱⁱ さとうわきこ（1989）『よもぎだんご』 28p. 福音館書店
- ⁱⁱⁱ 五十嵐裕子・大塚良一・野島正剛（2018）『子どもの豊かな育ちを支える 保育者論』 p.75. ミネルヴァ書房
- ^{iv} 心理科学研究会（2019）『新・育ちあう乳幼児心理学－保育実践と共に未来へ』 p.151. 有斐閣
- ^v 小西英子（2019）『のりまき』 24p. 福音館書店
- ^{vi} 栗原はるみ（2020）『haru_mi はるみの冬献立 vol.58』 p.83. 扶桑社
- ^{vii} 加藤繁美・塩崎美穂（2016）『子どもとつくる3歳児保育』 p.16. 名古屋研一
- ^{viii} 加藤繁美・齋藤政子（2016）『子どもとつくる4歳児保育』 p.26. 名古屋研一
- ^{ix} 保育計画研究会・編集委員会（2004）『実践に学ぶ 保育計画のつくり方・いかし方』 p.30. ひとなる書房
- ^x 小田豊・笠間浩幸・柏原栄子（2014）『新保育ライブラリ 保育・福祉を知る 保育者論 [新版]』 p.57. 北大路書房